

I 理念・目的・教育目標

2002年7月に設置された慶應義塾教養研究センターは慶應義塾の有する諸研究所の中でもっとも新しい研究機関の一つである。本研究センターは「21世紀という新たな時代において、教養の意味と意義を広くまた深く問い、教養に関わるさまざまな事柄を具体的に研究してゆくことが肝要である」との判断から設置された。「慶應義塾の目的」と呼ばれる福澤諭吉の文章、すなわち「慶應義塾は単に一所の学塾として自から甘んずるを得ず。其目的は我日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し、之を實際にしては居家、処世、立国の本旨を明にして、之を口に言ふのみにあらず、躬行実践、以て全社会の先導者たらんことを欲するものなり」という建学の精神に則り、教養に関しての多分野、多領域にまたがる事項を、慶應義塾内はもとより慶應義塾外との交流・連携に基づいて研究を推進していくことを通し、知の継承と発展に貢献することを目的としている。本センターの活動理念は研究を単に研究業績・報告書の形に留めるのみならず、実践的な活動、すなわち正規授業あるいは正規授業以外の様々な教育的活動への展開までを視野に入れて活動を行うことにある。

上記の点をふまえ、以下の四つ具体的コンセプトのもとに、さまざまな研究活動を展開している。

- ①時代と社会の変化に対応できる教養および教養教育にかかわる総合的な研究を企画・立案・組織し主体的な研究活動を展開する。
- ②教養および教養教育にかかわる研究を募集し、その推進をサポートする。
- ③研究成果を広く社会に発信し、教養や教養教育について積極的な提言を行う。
- ④研究活動全般に対する評価を受けることで、研究活動の質の向上・改善を行う。

II 教育研究組織

慶應義塾大学教養研究センターの組織は運営委員会、コーディネート・オフィスならびに小委員会から構成されている。

教養研究センターの基本方針、事業計画、研究プログラムの企画・運営、人事、予算等の基本的重要事項について審議決定するのが運営委員会である。運営委員会メンバーはセンター所長・副所長をはじめ大学各学部長、大学各学部日吉主任ならびに慶應塾内主要機関の長から構成されており、年2回の会議が開催されている。

教養研究センターの具体的事業活動を円滑に遂行するために設置されたのが、教員・職員が一体となって構成されるコーディネート・オフィスならびに小委員会である。コーディネート・オフィスには研究企画ボードを中心に研究推進、交流・連携、広報・発信の1ボード・3セクションと3つの特別委員会が設置されている。研究企画ボードはコーディネート・オフィスの中心をなす組織であり、教養研究センターの年次計画の策定および予算の立案、センター主導型研究の企画・運営と一般研究プロジェクトの選定、ならびに各セクションの活動の調整・統括などを行っており、ほぼ毎週会議が開催されている。

次に3セクションでは次のような事業をおこなっている。研究推進セクションは、センターに

おける研究活動が活発かつスムーズに展開されるための環境整備を担当すると同時に、各種研究情報の収集・管理や研究教育に関わる様々なセミナーの企画・提供を行っている。交流・連携セクションは、慶應義塾内外諸機関との交流・連携に基づく種々の企画を立案・運営するために必要な作業全般を行っている。広報・発信セクションは、センターの活動を定期的に伝えるためのニュースレターや活動報告書の編集・発行を行うと共に、活動の成果などをさまざまな媒体を有効に使って発信している。

また、特別委員会には日吉行事企画委員会（HAPP）、極東証券寄附講座運営委員会、慶應義塾大学港北区民講座運営委員会がありそれぞれ学生・地域住民を対象とした様々な教育プログラムの企画・運営を担当している。（Ⅲ 1（1）、Ⅸ（1）参照）

教養研究センターでは、コーディネート・オフィスに設置された研究企画ボードを中心に研究活動ならびに各種事業全体が円滑に進行するような組織形態が形作られており、またアドホック委員会を併設することで様々な事業に対して柔軟な対応が出来るようになっている。さらに、センター運営の重要事項の審議決定にあたる運営委員会構成メンバーは全塾的な意向が反映されるように配慮されている。

（当センター報告書末尾の資料1参照）

Ⅲ 教育研究の内容・方法と条件整備

Ⅲ－1 教育・研究指導の内容等

（1）教育課程

研究機関である教養研究センターが設置する授業科目は、センターで実施された研究活動と密接に関連しているとともに、日吉キャンパスの特徴である様々な専門分野を持つ教員の共同と協力のもとに、これまでとは違った教育課程の具体的内容について検討が行われてきた。

2000年度より日吉キャンパスに設置されている極東証券寄附講座は、2000年度・2001年度は「学ぶことを考える」として学生・地域住民を対象とした公開講座として行われてきた。教養研究センターが設置された2002年度には「教養とはなにか－よりよく生きるために－」のタイトルのもと各界から著名な講師陣を招きオムニバス形式の授業が行われた。そして2003年度はこれまでの成果をふまえ、内容をより学生向けに修正した公開講座「生命の魅惑と恐怖」を開講した。この授業は“広範な知の広がり”と連携”を学生に伝えるべく様々な専門分野の講師陣が共通のテーマのもとに企画されたものであった。（Ⅸ（2）参照）（資料6参照）

また、2003年度教養研究センターでは、学術フロンティアプロジェクト「リベラル・アーツ教育の総合モデル構築」との共同で実験授業「スタディ・スキルズ」を開講した。この科目は“問いを見つけ、調べ、まとめる”という大学で学ぶための基本的スキルの向上を目指した科目であり、正規の授業ではないが専門分野を異にする複数教員の担当による少人数（15名程度）で行う新たな形式の授業の可能性を検討したものである。「生命の魅惑と恐怖」・「スタディ・スキルズ」とも正規の授業ではないため単位には換算されないものであったが熱心な多くの学生の参加を得た。（火曜日クラス初期登録21名、17名履修、出席率94.12%、水曜日クラス初期登録14名、14名履修、出席率100%）

そしてこれらの経験・成果を基に、教養研究センターは2004年度から極東証券寄附講座「生命の教養学」・「スタディ・スキルズⅠ」・「スタディ・スキルズⅡ」の3つの科目を、全学部学生を対象として正規科目として設置するに至った。「生命の教養学」は複数の講師によるオムニバ

ス形式の講義科目であるが、オムニバス形式の授業の欠陥である各講義の関連性の欠如をコーディネーター役の教員のディスカッションを設けることにより全授業を通じての一貫性が失われないよう配慮されたものである。「スタディ・スキルズⅠ」は専門分野の異なった教員が共通のテーマによる講義と関連文献を提示し、これを基に様々な情報検索・整理の技法やレポート・論文の記述技法を少人数クラスの演習形式で学ぶものである。「スタディ・スキルズⅡ」は、「スタディ・スキルズⅠ」を発展させ、指定された講義科目（「生命の教養学」、「身体／感覚文化」とともに知の広がりや連携を念頭に置いたオムニバス講義）を聴講しその内容と関連する課題により授業を進めるものである。このように教養研究センターでは学部横断的な教員の交流をもとに、新たな教育課程の展開に関して先進的なアイデアを取り入れたこれまでにはない形態の授業科目の展開を試み、教養教育のあり方を検証するとともにそのプログラムの提供を行っている。

(2) 高・大連携への取組み

まず教養研究センターに所属する所員は本務が大学各学部の者のみならず一貫教育校所属の者（6名）もあり、一貫教育校を持つ私学の特性を生かした研究活動が展開されている。

さらに、教養研究センターでは、様々なテーマのもとに教養教育のあり方を考えるシンポジウムを開催し、教育現場での問題点や新しい教育に関するアイデアについてのディスカッションを繰り返し行っているが、中学・高校の教員もこれらのシンポジウムにパネリスト等としてまた一般参加者として積極的に参加しており、中・高・大の教員が連携して教育課程・教育方法について議論を交わすことによって教育課程についての共通の認識をもつという試みがなされている。

このような活動を通して、今後一貫教育校を持つ私学としての特色のある高・大連携を含めた具体的教育プログラムの策定が可能となると考えられる。

(9) 障害をもつ学生への教育上の配慮

教養研究センター特定研究「文部科学省学術フロンティア『超表象デジタル研究センター』」プロジェクト「研究・教育・学習環境としてのバリアフリー」の研究成果を基に、障害をもつ学生に対してどのような配慮が必要であるか、検討を進めている。2001年度には視覚障害のある学生に対するサポートが本プロジェクトの関連で行われた。

Ⅲ－２ 教育・研究指導方法とその改善

(1) 教育効果をより適切に測定（評価）するための工夫改善への組織的取組み

ボランティアに参加する学生を募り 2003 年度に実施された実験授業「スタディ・スキルズ」では、参加学生からのヒヤリングやアンケートを数回に渡って行った。教養研究センターが設置する科目では授業を担当する複数の教員が授業展開の打ち合わせを頻繁に行い、ここでは学生からの要望・フィードバックをもとに学生の技量やその教育効果が十分吟味されてきた。また、公開講座「生命の魅惑と恐怖」でも、コーディネーター役の複数の教員による綿密な打ち合わせの上に授業が展開した。これらの結果をふまえ、教養研究センターは少人数科目である「スタディ・スキルズⅠ」「スタディ・スキルズⅡ」と講義科目「生命の教養学」を 2004 年度より正課科目として設置した。

教養研究センターが設置する科目は複数の教員が担当する点に特徴があり、教員間の綿密な連携と学生からのフィードバックを重要視している点であるが、一番大きな特徴は正規科目として立

ち上げる以前にその教育内容が適切であるかを吟味する実験的授業を行った点にある。

(3) 適切な履修指導または効果的な研究指導を行うための制度・工夫

教養研究センターでは、今後全塾的にあるいは各学部で行われるであろう、様々な教育内容の厳密性・客観性維持する制度・システムの導入を見据え、大学教職員を対象として連続セミナー「FDを考える」を実施してきた。これまでに「アメリカの授業運営」、「学生の授業評価とFD活動」「GPA・アドバイザー制」について講演並びにディスカッションが行われた。これらの活動を通して各学部・緒研究所所属教員の教育資質の向上に対して支援を行うとともに、FDを始めとする様々な制度・システムを検証し、その実効性の向上・改善を目指している。（当センター報告書末尾の資料2参照）

(6) 情報機器を活用した教育の実施状況

教養研究センターが設置する少人数科目である「スタディ・スキルズⅠ」（20名）「スタディ・スキルズⅡ」（20名）では、学生一人一台のPCを準備し、資料検索やレポートの執筆、プレゼンテーションの準備が滞りなく進むよう配慮している。

(8) セメスター制の導入状況あるいは導入計画

セメスター制導入を前提として開設科目はすべて半期科目として設置している。

Ⅲ－3 国内外における教育研究交流

(1) 国際交流推進に関する基本方針および国際交流の現状と課題

教養研究センターでは、交流・連携セクションが慶應義塾内・外諸機関との交流・連携を促進するために活動を行っている。シリーズ「開かれゆくキャンパス」は、交流連携セクションが企画する塾内諸機関をはじめ地域、塾外諸機関との交流・連携のあり方について検討する連続セミナーである。

その第1回目のパネル・ディスカッションとして「国際学生懇談会 in Hiyoshi」を国際センターの協力のもと2003年12月12日に開催した。これは、増加する外国人留学生や海外に留学する塾生がそれぞれ異文化の中でどのような問題を抱えているか、について焦点を当てたものであった。パネリストとして外国（中国、韓国、フランス、ドイツ）からの留学生4人と日本人留学経験者3人が各自の留学経験を披瀝しながら、日本と諸外国の大学を比較し、様々な問題点について討議した。（参加人数40名：学生30名、教員10名）

ここで明らかになった問題点は、日吉・三田キャンパスにおいては外国人留学生と日本人学生が日常的に交流する機会・場が限定されているということである。国際センターを中心として、日本人学生の有志が留学生たちと積極的にかかわりを持ち、彼らの生活をさまざまな面でサポートしていることは高く評価できる。しかし、キャンパスライフ全体から見ればあくまで局所的である。もっと日常的に留学生と日本人学生が交流できる環境を大学が用意すべきであろうということである。これには、外国語教育の現場においてTAないしSAとして留学生を活用する、あるいは日本人学生が望めばいつでも留学生と交流できるスペースを常時キャンパス内に設置する、など様々な交流の機会や実現可能性を検討する必要があることが指摘された。

また、日本人学生の海外留学については、年々交換留学等により留学する者が増えているとはいえ、全体としてみればまだまだ数は限られている。従来の交換留学制度をより充実させるために提携先を増やす、ないしは学生への広報活動をより積極的に行なうとともに、新たに海外における NGO 活動などに長期インターンシップとして参加できるようなプログラムを開発する必要性が指摘された。

この様に教養研究センターでは、国際交流推進についてもその現状の把握と新たな展開の可能性を検討している。

(2) 外国人教員の受入れ体制の整備状況

教養研究センターには各学部・諸研究所に本務を持つ教員が所員として、学外の研究者は兼任研究員として自発的に登録することが出来る。現在、教養研究センターに登録されている外国人教員は所員 10 名、兼任研究員 3 名である。

内訳は、学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクトメンバーが 3 名、コーディネート・オフィスのメンバーとしてセンターの運営に直接携わっている者が 2 名。その他、センターの各研究プロジェクトに参加している者 6 名の合計 11 名（延べ人数）である。これは日吉地区各学部外国人教員 30 名のうち 1 / 3 にあたる。

また、兼任研究員は特定研究「超表象デジタル研究センター」プロジェクトで活動する研究者であり、通常は海外の本務校に在勤している。来日する際には、訪問教授室などの研究個室（3 部屋 6 人分のデスクスペース）ならびにプロジェクト研究室を活用し、共同研究活動を行うことが出来る。研究のサポート体制としては、兼任研究員が来日した場合、大学メディア・センターや ITC との連携のもと、各種サービスを受けることができるよう配慮されている。

IV 研究活動と研究体制の整備

IV-1 研究活動

(1) 論文等研究成果の発表状況

教養研究センターの研究成果は、「慶應義塾大学教養研究センター活動報告」にまとめられる。これまでに 2002 年度分が発行されており、2003 年度の報告書は 5 月に発刊予定である。この活動報告にはそれぞれの研究プロジェクトごとの論文等研究成果の発表状況が示されている。

教養研究センターではその研究成果を書籍としても提供している。2003 年 9 月には、教養研究センター編、慶應義塾大学出版会発行「教養を考える ―現代を読みとくために―」を刊行した。また、慶應義塾大学教養研究センター選書の発行も行っている。本研究センターにおける学術研究成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信して新鮮な知の一石を投じ、研究・教育相互の活性化を目指す目的で出版された市販のブックレットである。2004 年 3 月 31 日には第 1 巻として「モノが語る日本の近現代生活－近現代考古学のすすめ－」を発行した。

また、センターの研究活動全般を広報する年 2 回発行のニューズレター（これまでに 3 部）や、セミナー・ワークショップ後に随時発刊されるレポート（これまでに 4 部）により研究成果の公表が随時行われている。

さらに、センターが開催したシンポジウム（当センター報告書末尾の資料 3 参照）に関しては、それぞれ下記の報告書が作成された。

- | | |
|--------------------------|--------------|
| 第1回「教養教育をめぐって」、 | 2002年11月15日、 |
| 第2回「外国語教育を核とした教養教育の将来」、 | 2003年3月31日、 |
| 第3回「自然科学教育を核とした教養教育の将来」、 | 2003年9月30日、 |
| 第4回「身体知を核とした教養教育の将来」、 | 2004年2月4日。 |

研究活動に関する成果のうちニューズレターおよびレポートは、教養研究センターのウェブ・サイト (<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>) にも適宜発表されている。

(2) 特筆すべき研究活動状況

教養研究センターで行われる研究プログラムには、基盤研究、特定研究、そして一般研究がある。ここでは、研究助成を得て行われる特筆すべき研究プログラムとして、基盤研究と特定研究を取り上げ、それらの展開状況を記述する。

1) 基盤研究

基盤研究は、センターの企画する教養研究を中心とした継続的共同研究である。慶應義塾大学出版会からの研究補助金を得て、これまで運営されてきている。

研究グループは専任教員を中心としたセンター所員によって構成されている。研究プロジェクトは2002年7月の開所時からスタートしたが、2003年9月までは、「リベラル・アーツ研究」と「外国語教育研究」の二つのテーマにそって、教養教育の有意・有効なシステムとプログラムの検討が行われてきた。2003年10月には、国立大学の独立行政法人化、大学院重点化、そして18歳人口の減少による大学全入化時代の到来などの様々な社会的状況を踏まえ、次の2点を研究課題とした本格的な研究活動が開始された。

- ① 全塾的な教養教育・学士課程教育のあり方について理念・目的などの議論を行い、これを基礎として、慶應義塾が抱える豊富な人材を活用した一貫的で体系的な教養教育カリキュラムの実現可能なモデル構築を目指す。
- ② ここで想定されたカリキュラム・モデルを実施に移す場合に必要とされる制度・システムについての検討を行う。

現時点では、日吉キャンパスにおけるすべての共通科目に対して、過去と現状の内容調査が行われている。すなわち日吉キャンパスで過去10年間開講された全学部の総合教育科目・少人数教育科目を調査・点検し、その傾向・整合性を改めて検討し、現在の社会にふさわしい新たな教養教育の在り方を探究している。2004年度中には、研究の成果を取りまとめて提言を作成する予定である。作成される提言が、これからの慶應義塾における教養教育のあり方の示すものとなり、具体的カリキュラム策定の指針となることを目指して活動を行っている。

2) 特定研究

特定研究は、文部科学省の高度化推進事業学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」研究プロジェクトがこれにあたる。

A. 本研究の目的

20世紀の後半に顕著になった人間を取り巻く諸環境の危機的状況は、21世紀に入った今もなお拡大し続けている。しかし人間のあり方を研究する人文科学研究(humanities)は問題に対処するための有効な方策を提示していない。それは研究の対象から共通の法則を見つけようとする自然科学の場合とは異なり、人文科学は人間とその活動の多様性そのものを研究対象とするゆえ、研究目的、研究領域、方法論、データの収集等に関して細分化され、相互の連携が進んでい

ないためである。本プロジェクトは、多様な表象活動を統合的に捉えることにより、かかる人文科学研究の問題を少しでも克服することを目指すものである。すなわち、最新のデジタル技術を通じ、さまざまな表象活動を相互に関係を持つハイパー（超）構造に変換することにより、人文科学の持つ発散性を解消し、同時に時間・空間に依存しない普遍的な「文化態（パターン）」を見出すことを目指す共同研究の拠点構築を目的とする。

人間の表象活動は、外的世界のインプレッションを自己の中でいったん意識像として捉え、運動、音響、絵画・図像、舞台、文学、言語表現等々の媒介手段を用いて外部に表出して完結する。これらの表象形式には、時間と空間の違いにより大きな隔たりが見られる。この隔たりが、人間と人間のコミュニケーションを阻害し、さらには衝突や紛争を生じさせている。よって本プロジェクトは、まず①隔たりのある表象データをアナログ・データとして捉え、収集・集積し、②それらをデジタルに変換し、変換されたデジタル表象データを用いて時間的かつ空間的な関係をシミュレートしながらハイパー構造を発見する。そして、③このハイパー構造の中から時間・空間的に限定のない普遍的な構造、すなわち「文化態（パターン）」を発見する。④この結果を外部へ発信し、広く世界の研究者からのフィードバックを得て文化態の精緻化を図る。⑤最終的には、研究の結果を人間の表象活動に還元し、人間の危機的状況からの解放の方策の提示に資する。

本研究組織はこのようなアプローチを実行に移すための先導的研究拠点として位置付けられ、同時にその成果をリベラル・アーツ分野の教育の実践に展開していく先端的なリベラル・アーツ研究教育拠点であることも目指す。

B. 組織と研究メンバー

B-1 事務局

本研究は、研究代表の統括する事務局と、その管理のもとで活動する個別の研究プロジェクトからなっている。

事務局は、研究代表者の統括の下に、日吉研究支援センターの支援・協力を受け、事務職員数人が担当している。本学術フロンティアの通信・連絡の本部として、また会計担当部署として、研究代表者会議をはじめとして、全体に関わる事項を検討する委員会・小委員会やその他の全体に関わる催しの開催・運営などに当たっている。

現在に至るまでの活動においては、事務的な職務の遂行は、きわめて円滑に行われてきたし、研究に直接かわることがらでも、全体を円滑に進めるために、十分に機能している。

B-2 個別研究プロジェクトについて

個別研究プロジェクトは研究代表者と研究メンバー、研究協力者などからなり、研究については研究代表者が責任を負っている。研究に関わる会計事務については事務局が担当している。個別の研究プロジェクトとそのテーマは以下のとおりである。

2002年度プロジェクト

- ①外国語の自律・持続型学習プログラムの開発
- ②インターキャンパスの創出による多文化共生
- ③文化としてのウォーキング
- ④民族イメージの言語性と身体性
- ⑤研究・教育・学習環境としてのバリアフリー

2002年度追加プロジェクト

- ①21世紀のアメリカをめぐる文化のダイナミズム
- ②フレーム意味論・構文的アプローチによるオンライン日本語語彙情報資源の構築
- ③空間と人間：キャンパス・スフェアにおける適応・生態・表象・デザインの分析と展開
- ④リベラル・アーツ教育の総合モデル構築

2003年度追加プロジェクト

- ①大学キャンパスにおける学生の不適応の総合的研究
- ②異文化共存の可能性と限界―地中海世界における異文化ネットワークと人口移動
- ③色と紋様の総合科学―異分野からのアプローチ

3) 研究活動について

2002年に学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」の拠点としての施設（来往舎内プロジェクト室他）も完成し、設備もフルに資料できるようになった。各プロジェクト室での研究会をはじめとして、シンポジウムスペースや会議室なども利用され、活発な研究活動が開始された。研究の性格上、作業量も多いため、学生を中心とするワーキング・グループが作業を進め、その進捗に応じて内外の多くの研究協力者からなる研究集会で発表し意見や批判を仰いで、その結果をフィードバックしながら研究が進められた。

2003年度には4月～5月にパネルによる中間報告会（来往舎ギャラリー）が実施された。さらに、5月には前年度9月に提出した中間報告書およびその後に行われた訪問審査の結果が文部科学省より送られ、それを反省材料としてその後の研究の重点目標が再構築された。（問題点として挙げられたのは、①個々のプロジェクトと全体のコンセプトとの関連性・統合性の弱さ。②蓄積されたデータを統合的に利用するコンセプトとシステムの弱さ。このような指摘を受けて、第一に「教養」教育の実践ということに全体のプロジェクトをもっていくこと、蓄積したデータのデジタル化を進めると同時に、それを相互に関連付けるコンセプトを明確に打ち出しシステムを構築すること、などが全体の今後の課題であることが確認された。）

2004年1月には中間報告会が実施され、2月にはデジタル化小委員会を立ち上げ、本格的なホームページ構築を初めとして全体的なデータのデジタル化による統合と総合のコンセプトを確立するとともに、それに沿ってシステムを立ち上げるための検討と実際の作業を開始した。

(3) 付属研究所との関係・将来展望

教養研究センターには専任の教員はおらず、各学部・諸研究所所属の教員が所員登録することにより組織が構成されている。全学部、特に日吉キャンパスで展開する教養教育に関係する教員が中心となって活動を行っている。このため、立場を異にする異分野異領域を専門とする教員が、様々な観点から教養についてディスカッションを交わせることが大きな特徴となっている。

今後も所属機関の枠を越えた人的交流のもと、活発な議論が展開されていくことが期待される。

Ⅳ－２ 研究体制の整備（経常的な研究条件の整備）

(1) （個人・共同）研究費・研究旅費の充実度・問題点

教養研究センターで行われる研究プロジェクトには基盤研究、特定研究、一般研究の3つの研究領域が設定されている。

基盤研究の研究費は、慶應義塾からの経常予算と指定寄付金があてられている。研究活動は2003年度から本格的に活動を開始したため、2002年度分の指定寄付は2003年度に繰り越された。

2002年度経常予算 600,000 円（研究旅費 0 円）、指定寄付金 2,000,000 円

2003年度経常予算 1,268,000 円（研究旅費 0 円）、指定寄付金 2,000,000 円

特定研究の研究費は学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」の研究資金（文部科学省補助金と経常予算の折半）があてられている。

2002年度 30,000,000 円（研究旅費 2,870,000 円）

2003 年度 30,000,000 円（研究旅費 10,380,000 円）

一般研究の研究費は各プロジェクトが文部科学省その他の科学研究費、学術創成研究費などの慶應義塾外資金、および学事振興資金をはじめとする慶應義塾内研究費の公募に対して応募し、獲得している。

研究旅費に関しては、基盤研究と特定研究については慶應義塾の出張規定の範囲で研究者の裁量で支出できる。一般研究の出張旅費については各補助金の規則による。

今後は一般研究に対しても研究の推進を計るため、教養研究センターの資金から支援出来る体制を作ることが望まれている。

(2) 教員研究個室等の整備状況と将来計画

教養研究センターには共同研究のためのプロジェクト室が12室ある。その割り当ては、基盤研究2室、特定研究6室、一般研究4室である。各室には作業用デスクならびに書架があり、このうちパーソナルコンピューターやプリンターが設置されているプロジェクト室が7室。各種映像等の編集機材が設置されているプロジェクト室が1室ある。

この他に OA 機器室、教材作成室、スタジオ、編集室、会議室3室、シンポジウムスペースなどの研究発表用のキャンパスとの共同スペースがプロジェクト室に隣室している。（当センター報告書末尾の資料4参照）

(4) 特筆すべき競争的な研究環境の創出

教養研究センターでは研究推進セクションが中心となり日吉研究支援センターの協力のもと「科学研究費取得のための勉強会」（2002年10月10日開催 参加者23名、2003年10月2日開催 参加者26名）を開催している。この勉強会では、科研費を獲得した教員の「申請書類作成上のポイント」についてのミニ・レクチャーと、申請書の記入要領や申請手続きについての説明が行われる。

これらの活動によりより多くの研究者に科学研究費補助金への申請を促すとともに獲得者数の増加を目指している。

(5) 研究論文・研究成果の公表を支援するための措置や大学・研究機関間の研究成果を発信・受信するシステムの整備

教養研究センターでは、本センターにおける学術研究活動の成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信して新鮮な知の一石を投じる目的で、慶應義塾大学教養研究センター選書の発行を行っている。これは研究と教育の相互関連を目指して行われる事業であり、年2冊のペースで今後発行していく予定である。

また、教養研究センターではウェブサイトを立ち上げ、研究報告会・シンポジウムなどの教養研究センターの研究・教育活動については常時発信しているが、これまでの研究成果のデジタル・アーカイブ化との関連や相方向性の導入などについて、今後どのようにするか検討が行われている。

V 学生の受入れ

VI 教育研究のための人的体制

(1) 教員組織

教養研究センターの組織についてはⅡで示した通りである。またセンターの人的体制は以下のとおりである。(資料1 参照)

運営委員 31 名

所員(専任教員) 165 名(2004 年 3 月 31 日現在)

兼任研究員(慶應義塾非常勤教員など塾外者) 38 名(2004 年 3 月 31 日現在)

学生研究員 1 名(2004 年 3 月 31 日現在)

コーディネート・オフィス担当所員数 58 名(2004 年 3 月 31 日現在)

研究企画ボード 17 名

交流・連携セクション 16 名、研究推進セクション 14 名、広報・発信セクション 11 名、
港北区民講座運営委員会 13 名、

極東証券寄附講座運営委員会 16 名、

日吉行事企画委員会(HAPP) 24 名

基盤研究参加者 22 名(所員 22 名)、特定研究参加者 77 名(所員 61 名、兼任研究員 15 名、学生研究員 1 名)、一般研究参加者 92 名(所員 65 名、兼任研究員 21 名、)

教養研究センター所員は各学部や他付属諸機関を本務としているため、本務での業務とは別に教養研究センターでの研究活動を行っている。所員はさらに教養研究センターが主催する多くの企画立案や実行に深く関わりを持ち、これらの活動は慶應義塾内外の諸機関とのリエゾンの役割を担っているものである。本務と教養研究センターでの研究活動に加え、スタッフとしてのリエゾンの業務はいささか過重のきらいがあることは否めない。

(2) 研究支援職員・組織の充実度

日吉研究室・日吉研究支援センターの職員数は、職員 6 名(うち専任 4 名、常勤嘱託 2 名)、派遣職員 1 名、アルバイト 1 名である。このうち、教養研究センター担当として専任職員 2 名が兼任している。教養研究センターの活動内容から考え、2 名の兼任では教員コーディネーターに業務の一部を負担してもらわざるを得ないのが状況である。

(4) TA 制度・SA 制度・RA 制度

教養研究センターでは、2003 年 10 月から「学生研究員」(Student Researcher) 制度を新たに設置した。学生研究員は、教養研究センターの研究プロジェクトのために所員・研究員・職員と協働してプロジェクトを推進する学部学生の研究員である。その第 1 号の学生が 2004 年 1 月より活動しているが、今後さらに多くの学生がこの資格を利用し、センターの研究活動に直接的に貢献するとともに、学生自らの将来につながる経験を積むことがのぞまれる。

(5) 教員の募集・任免・昇任

教養研究センターでは所員の募集は随時行っている。任期は年度単位で2年間となっている。プロジェクト活動に参加し、さらにコーディネート・オフィスの一員として活動する者もいる。また、コーディネート・オフィス・メンバーとしては各学部・附属諸機関から推薦を受けたものもいる。

(6) 任期制、有期契約教員等、教員の流動性を促進する制度および任用の状況

教養研究センターの所員は原則として2年間の任期制であるが、再任を妨げるものではない。また兼任研究員は研究プロジェクトの活動期間が任期となっている。

(8) 学内外の教育研究組織・機関との人的交流の状況

コーディネート・オフィスが中心となり、他大学調査として2003年1月～2月にかけて全国の国立・私立大学等（北海道大学、東北大学、九州大学、広島大学、広島修道大学、京都大学、立命館大学、同志社大学、コンソーシアム京都）に出向き、調査ならびに教養教育のあり方についての意見交換をした。2003年7月には大韓民国から均成館大学、2004年2月には同国プサン国立大学が、調査のため来校し意見交換を行った。また、2004年1月にはソウル大学の教養教育に関する調査を行った。

教養研究センターの研究プロジェクトには塾内外の諸機関と連携を図って活動を行っているものも多くある。

VII 施設・設備等

VII-1 施設・設備等の整備

(2) 学生・教員に対する情報機器の利用環境・機器配備状況

教養研究センターにおける情報機器の配備状況は資料4に示した通りである。また研究施設であるため、一般の学生の利用は原則的に認めていない。以下に利用上の問題点等を示す。

共同研究室は、プロジェクター・ノートパソコン・プリンターが即座に活用できる良い環境である。また編集室は、機材に対してスペースにゆとりがない点が問題とされるとともに、映像・音響処理関連のソフト・ウェアが不十分である。スタジオに関しては、防音装置がついていないため、高度な機能を持つ撮影装置を十分に活用することができない。OA機器室にある大型のポスタープリンターは、各種イベント際に有効活用することが出来る。イベントテラスの大型スクリーンと液晶プロジェクターは効果的に利用できるものである。プラズマディスプレイは、その構造上移動の際に破損しやすいため、利用に制限が加えられる点が問題である。

今後配慮しなければならない点は、スタジオの防音装置化、各種機器を利用可能にするためイベントテラスの電流容量の増量、ギャラリーへのスピーカー設置、機材や資料・書籍等を収蔵する場所の確保、などがあげられる。

(3) 施設・設備の社会への開放に対する配慮

来往舎内のイベントテラス、シンポジウムスペース、そしてギャラリースペースの3施設が、社会（キャンパス内外コミュニティー）に開放される主な場所として利用されてきた。これらの施設では、教養研究センターにおける一般研究の成果発表や、研究を行う場所として利用され、さらには、教養研究センターに所属している教員による授業を履修している学生が、日頃の学習の成果を発表する場所としても使われ、多くの地域住民の参加を見ることができた。

これらの施設はまた、教養研究センター日吉行事企画委員会（HAPP）が企画した新入生歓迎行事、さらには、HAPPが主催し公募した、学生および教職員による催し物などに用いられた。これらの行事に参加した人々は日吉キャンパス近くの地域住民にとどまらず、遠方からの利用者も多数あった。

来往舎は、東急東横線日吉駅からわずかの距離に立地しており、キャンパス内でも比較的一般の人々が訪れやすい場所となっている。特にイベントテラスは、ガラス張りで、さらには天井までが吹き抜けとなっているため、開放感が大いにあり、来訪者に排他的なイメージを抱かせない構造になっている。その反面ギャラリースペースは、来往舎の奥まった場所に位置しているため、施設としてのアピール度が低く、ここを利用した催し物の中には、期待以下の参加者数しか記録できなかったものが多かったようである。ギャラリースペースを今後どのように有効的に利用かつ広報していくかは、これからの重要課題である。

人々が集まりやすいイベントテラスであるが、いくつかの欠点も露見した。最大の難点は、ステージにあたる床面は平らであるが、それ以外の場所は傾斜がある点である。椅子を用意した場合そのほとんどが座りにくいポジションでしか配置できないため。長時間の催し物には問題があった。また、イベントテラスは、屋外と一体というコンセプトのため、冷暖房の設備が無い。このため冬季期間中における催し物の開催は、来訪者の観点から適切ではない。また春先や秋口でも日が暮れると気温が下がり、落ち着いた気分で催し物に参加できない場合もある。また、風などの天候条件により、雑音が多くなり、繊細なイベントが行えない場合もあった。金属製のシャッターは時により大きな打楽器となって雷のような音を発生する。また、空調機器の出す音も人の生の声を尊重するような催し物の場合注意が必要となる。

イベントテラスは、特定の催し物を行うために設計されている施設ではないため、これまでに行われた様々なイベントに十分対応していたとは言い難い。舞台、照明、音響設備など課題点は多く、今後より一層の活用を期待するためにも、現状の把握とともに改善を加えていくことが必要であると考えられる。このことはイベントテラスだけでなく、他の施設にも当てはまる事柄である。

VIII 図書館および図書等の資料、学術情報

IX 社会貢献

(1) 社会人向け教育プログラム・公開講座の開設状況

1) 横浜市港北区民講座（公開講座）

横浜市港北区の依頼を受け、港北区民を対象とした「慶應義塾大学港北区民講座」を、2002

年度より2年間にわたり実施した。コーディネート・オフィス内に設置された港北区民講座運営委員会がこの講座の企画・運営にあたった。2002年度は「実践講座：ウォーキングの理論とその文化的背景」として、ウォーキングの実践と講演会を3週にわたって10月の毎週土曜日に実施した。2003年度は「DNAとナイロンの実験をしてみよう」として、生物学教室および化学教室の協力のもと9月に1日の日程で講座は実施された。それぞれの講座は、いずれも実践型・体験型内容として企画・実施された。(当センター報告書末尾の資料5参照)

横浜市港北区民講座予算規模

2002年度予算

¥500,000

2003年度予算 ¥300,000

2) 極東証券寄附講座

2000年度より、極東証券株式会社の寄付を受けて極東証券寄附日吉キャンパス公開講座運営委員会を発足させ、学生はもとより広く一般市民をも対象とした多領域横断型の講座を企画した。

2000年度秋学期には「『学ぶこと』を考える」、翌年2001年度秋学期にはその続編「『学ぶこと』を考える2」を開講した。また、その成果の一端として講演録2巻を刊行した。2002年7月の教養研究センター発足とともに、当該寄付講座の運営母体をセンターに移管し、その秋学期に「『教養』とは何か—よりよく生きるために」(翌年講演録を刊行)、2003年度には「生命の魅惑と恐怖—生命にまつわる多彩な知をめぐって」とのテーマで寄付公開講座を開いた。(当センター報告書末尾の資料6参照)

講座予算規模

2002年度予算

¥5,000,000

2003年度予算 ¥5,000,000

3) 日吉行事企画委員会 (HAPP: Hiyoshi Art & Performance Project) 企画行事

HAPPの活動は教養研究センターによる研究教育活動の一部であるが、行事は塾生を対象とするとともに全て地域住民に開放されている。また、企画責任者は、慶應義塾内の教職員・学生に限られるものの、学外者も協力者として参加することが可能である。(当センター報告書末尾の資料7参照)

2002年度は

- ① 新入生歓迎コンサート「春の声」、
- ② 「塾長と日吉の森を歩こう・写真コンテスト」、
- ③ ミズノ陸上競技場での「フットサル」、
- ④ 能装束の展示と人間国宝坂井音重氏(塾員)による能楽公演、
- ⑤ 展示とライブによる「デカルコマニ」、
- ⑥ アート・センター共催による「神の子たち」映画上映会、
- ⑦ 学生教職員共同企画の「慶應コレギウム・ムジクム演奏会」。

この他にも、二つのコンサート、四つの学生企画が行われた。特に、来往舎イベントテラスに能舞台を組み、新緑をバックにしての能「清経」の公演は、新入生と来往舎開館を寿ぐ2002年度新入生歓迎行事の白眉であった。通常の能楽公演とは異なる環境でありながら、新入生のみならず、地域住民からも700名を越える多くの来場者があり、共に能の真髄を堪能した。

2003年度は①新入生歓迎セクションと②公募企画セクションを二本の柱として様々な行事を開催した。新入生歓迎セクションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトで、第一線で

活動するアーティストや地域住民を巻き込んだ行事を行った。ここでは、新入生歓迎コンサート「春の声」、地域住民参加型「フットサル」などこれまで好評を博した企画を継続するとともに、語学視聴覚研究所との共催による荻野アンナ教授講演会、慶應能楽研究会（観世会）との共催による坂井音重氏の能楽公演「葵上」、アート・センターとの共催による和栗由紀夫舞踏公演「野の婚礼―新しき友へー」など慶應義塾内諸機関・諸団体との共同開催が一つの特徴となった。さらにパトリック・ヌジェによるシャンソン・コンサート、そして、恒例になった「塾長と日吉の森を歩こう」（秋学期特別企画）なども企画された。一方、公募企画セクションは、主として秋学期に行う塾生・教職員の自主企画を HAPP が主催するものである。2002 年度の学生自主企画の経験を踏まえて、新学期早々には公募を開始し、夏休み前には選定を終え実行した。

大学で行われることは全て、専門・教養を含んだ広い意味での学問と結び付かなければならぬ。HAPP 新入生歓迎セクションを通して、慶應義塾が自由な発想をもって学問に向かい合う場であることを慶應義塾に新たに学ぶ学生諸君に感じてもらいたいと考え、同時に HAPP 公募企画セクションによって、慶應義塾は主体的な活動を通して学問を身に付け伝達してゆく場であることを示した。2003 年度、この目的は、上記活動の円滑な実施、報告書（日吉行事企画委員会事務局保管）に見られるように、ある程度実現できたのではないかと考える。今後の展望として以下 3 点を挙げる。

- ① 研究所、センター、学部との連携：2003 年度は、荻野アンナ講演会において視聴覚教室（現「外国語教育センター」）と、能楽公演において慶應義塾大学能楽研究会（観世会）と、舞踏公演においてアート・センターと共催した。学内諸機関などとの共催により、広報、予算、労力の面で大きなメリットが認められた。今後、このような形の連携をさらに促進することにより、教育・研究の効率化のみならず、より大きな企画が可能になると考え、一層推進すべきだと判断する。
- ② 実行事の記録をアーカイブとして構築してゆくこと：今後、継続的にこの企画を実行してゆく中で、いずれ過去の企画が研究教育実践の記録としての価値を増してゆくであろうことは容易に想像できる。そのため、どこかの段階で予算を取りアーカイブを構築することを目指すべきであると考え。あわせてメディア・センターなどと連携し、資料として永続的に保管する方法を考えたいと思う。
- ③ この委員会に関わる教員・職員の負担を職務として評価あるいは負担を軽減すること：この点に関しては、現在、委員会に関わる教員・職員の厚意と熱意によって、各企画が実現されているのが現状である。職場の中での、手当て・評価が必要である。

HAPP 予算規模

2002 年度予算	4,017,617	2003 年度予算	4,817,617
-----------	-----------	-----------	-----------

(2) 企業との連携としての寄付講座の開設状況

極東証券寄附講座

極東証券からの寄付を得てこれまで 4 年連続で公開講座（Ⅸ（1）2）参照）一コマを開設・実施してきた。2004 年度からは、教養研究センター設置の学部横断的な単位科目として履修を学生に限定し、もっぱら学生の知的基盤を先進的に養成するための講座に改め、極東証券寄附講座「生命の教養学」（コーディネーター制によるオムニバス総合講座）と、それとの連携を視野においた極東証券寄附講座「スタディ・スキルズ（Ⅰ・Ⅱ）」（共担制による演習科目）を設置することとなった。

XI 管理運営

(3) 教授会・研究科委員会等

教養研究センター運営の基本方針、事業計画、研究プログラムの企画・運営等の重要事項を審議し決定する機関が教養研究センター運営委員会である。運営委員会委員には各学部長、各学部日吉主任、日吉メディアセンター所長、外国語教育研究センター所長、日吉 ITC 所長と日吉キャンパス事務長、学事センター部長、日吉メディア・センター事務長などからなる教員・職員を含む 31 名のメンバーによって構成されており、年 2 回開催される運営委員会で全塾的な意向が反映されるように配慮されている。

またコーディネート・オフィス・メンバーは、各学部・慶應義塾内諸附属機関から推挙された者を中心に構成されており、学部横断的な構成が成されている。

現在までのところ、これらの組織は適切かつ十分に機能していると言える。

(5) 学部・研究科等の意思決定プロセスの透明度等

教養研究センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するために設けられたのがコーディネート・オフィスであり、その小委員会である研究企画ボードが中心となって研究センターの事業の企画・運営の実務にあたっている。研究企画ボードを中心とするコーディネート・オフィスが策定した原案と事業報告は年に 2 回開催される教養研究センター運営委員会で審議される。これらの意思決定プロセスの透明度は十分なものであるといえる。

さらに教養研究センターでは、活動報告書をはじめとして、シンポジウム報告書・ニューズレター・レポートあるいはウェブ・サイトといった各種広報媒体を用いて、シンポジウム・セミナー・各種行事等の内容を広く慶應義塾内・外に公開することにより、活動内容の透明性の確保を期している。

XII 財政

XII-1 教育研究と財政

教養研究センターの財政基盤は経常予算、指定寄付と文部科学省「私立大学学術研究高度化推進事業」「学術フロンティア推進事業」によっている。この中でも、期限付きプロジェクトである文部科学省の学術フロンティア推進事業による研究補助金が、教養研究センター全資金に対して占める割合が大きい。今後慶應義塾外部からの新たな教育研究資金の導入と、教養研究センターの財政基盤の中心となる経常予算の増収が望まれる。

XII-2 外部資金等

(1) 文部科学省科研費、外部資金（寄付金、受託研究費、共同研究費等）の受入れ状況

文部科学省科研費ならびに外部資金の受入れ状況は下記に示すとおりである。

2002 年度

補助金 文部科学省「学術フロンティア推進事業」1 件 30,000,000 円

指定寄付 2 件 7,000,000 円（極東証券寄附講座 5,000,000 円、基盤研究 2,000,000 円）

2003 年度

補助金 文部科学省「学術フロンティア推進事業」1 件 30,000,000 円

指定寄付 2 件 7,000,000 円（極東証券寄附講座 5,000,000 円、基盤研究 2,000,000 円）

以上の研究資金は、すべて日吉研究支援センター・日吉事務運営サービス（用度・会計）のもとに適切に管理・運営されている。

XII-3 予算配分・予算執行のプロセスの透明性

XI（5）で示したように、教養研究センターの事業計画はコーディネート・オフィスに設けられた研究企画ボードが中心となって行い、教養研究センター運営会議でこれを審議・決定する。予算ならびに決算に関しても同様のプロセスを経て、決算の承認と各年度活動計画の企画・立案に伴って編成された予算が、教養研究センター運営委員会で審議・決定・承認される。予算に関しては、その後大学との調整が行われるため、年度によって予算配分は活動計画どおりにならない場合もあるが、これら予算の配分と執行のプロセスには十分な透明性と適切性がある。

XIV 自己点検・評価

(1) 大学全体および各学部・研究科等における恒常的な自己点検・評価システムの確立状況

2002 年 7 月の設立以来、多様な研究活動の企画、実施、広報、記録をおこなってきたが、開所からまだ2年を経っておらず、具体的な自己点検・評価システムの確立は現在までできていない。しかし、その重要性は十分認識しているので、近い将来実施できるよう、これまでの活動に対する記録を様々なメディアによって記録保存している。

以 上

資料について

資料1 「慶應義塾大学教養研究センターコーディネートオフィス組織図」

資料2 大学教養研究センター連続セミナー「FDを考える」

資料3 大学教養研究センターシンポジウム

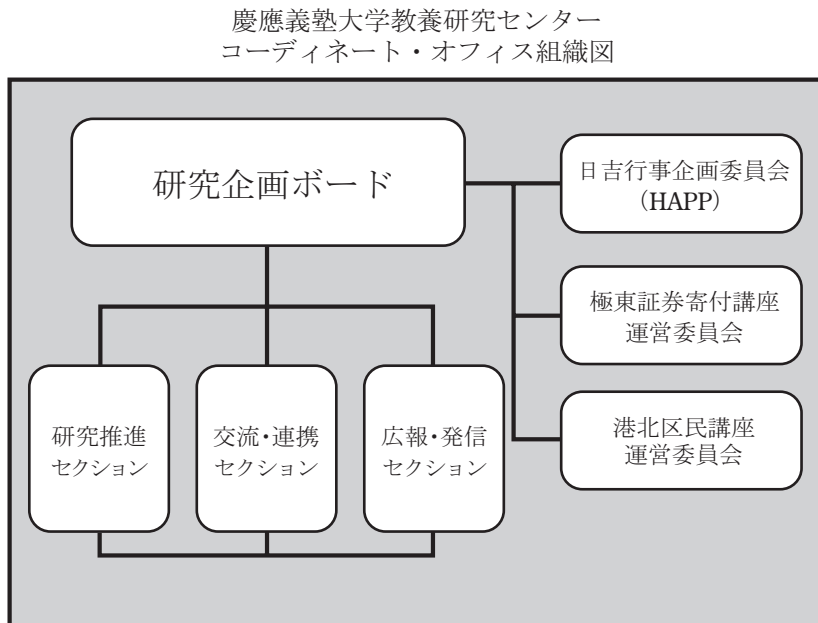
資料4 大学教養研究センター関連施設・面積など（来往舎共用スペース含む）

資料5 大学教養研究センター横浜市港北区民講座

資料6 大学教養研究センター極東証券寄附講座

資料7 大学教養研究センター日吉行事企画委員会（HAPP）

資料１ 慶應義塾大学教養研究センター コーディネート・オフィス組織図



資料２ 大学教養研究センター連続セミナー「FDを考える」

FDを考える・第１回「アメリカの授業運営・FD事例の報告」

日時：平成１５(2003)年１０月９日（木）

講師など：司会１名、講師１名、コメンテーター１名

参加人数：２１名（教員１７、職員３、その他１）

FDを考える・第２回

「学生による授業評価とFD活動－シラバスと授業評価・SFCにおける１２年の推移－」

日時：平成１５(2003)年１０月３０日（木）

講師など：司会１名、講師１名

参加人数：２７名（教員１７、職員８、学生１、その他１）

FDを考える・第３回

「日本の大学の欠陥を補完する制度・GPA／アドバイザー制」

日時：平成１５(2003)年１２月４日（木）

講師など：司会１名、講師１名

参加人数：３０名（教員１９、職員８、学生１、その他２）

資料3 大学教養研究センターシンポジウム

第1回（開所記念）シンポジウム「教養教育をめぐって」

日時：平成14(2002)年9月30日（月）

講師など：挨拶 担当常任理事

概要の紹介：教養研究センター所長

（第1部）：司会1名、パネリスト4名

（第2部）：司会1名、パネリスト3名

参加人数：約170名

第2回シンポジウム「外国語教育を核とした教養教育の将来」

日時：平成15(2003)年2月5日（水）

講師など：司会1名、パネリスト4名

参加人数：約70名

第3回シンポジウム「自然科学系を核とした教養教育の将来」

日時：平成15(2003)年7月4日（金）

講師など：司会1名、パネリスト4名

参加人数：約50名

第4回シンポジウム「身体知を核とした教養教育の将来」

日時：平成15(2003)年11月26日（水）

講師など：司会1名、パネリスト5名、ディスカッサント1名（塾外）

参加人数：約50名

資料4 大学教養研究センター関連施設・面積など（来往舎共用スペース含む）

大学教養研究センター施設（設置機材などを含む）

階	施 設	m ²	設置機材など ()内台数
1	コーディネートオフィス	173.31	「貸出機材一覧」参照。研究室事務室・研究支援センターと共用
1	応接会議室	32.22	42インチプラズマ(1)、AV機器一式(1)、ボードファックス(1)
1	101・102	83.34	PC(1)、プリンター(1)、スキャナー(1)、プロジェクター(1)、 スマートボード(2)、50インチプラズマ(1)
1	103・104	83.34	PC(8)、プリンター(2)、スマートボード(2)、 PWREC一式(1)、プロジェクター(1)
2	203・204・205・210	129.52	
2	206	32.38	MAC音響・映像編集用(1)、編集機器一式(2)、
2	207・208・209	97.14	各室 PC(1)、プリンター(1)、スキャナー(1)、 プロジェクター(1)、TV・ビデオ・CD・DVDレコーダー(1)
2	211・212・213: 訪問教授室	74.34	

来往舎共用スペース

階	施 設	m ²	設置機材など ()内台数
1	105・106(スタジオ)	83.34	MAC音響・映像編集用(1)、編集機器一式(2)、
1	107(編集室)	41.67	音響・映像編集機器一式(3)、スタジオ関係操作機器一式(1)
1	シンポジウムスペース&準備室	333.05	50インチプラズマ(6)、書画カメラ(1)、プロジェクター(1)、 カメラ(1)、AV機器一式&操作卓(1)、
1	同時通訳ブース	4.48	
1	同時通訳ブース	3.22	
1	アナログ表象サンプリングステージ	278	音響・照明・映像設備一式、200インチスクリーンなど
2	アナログ表象サンプリングステージ	154	(ステージ関係設備)
1	コラボレーションスペース	134	
2	ギャラリー&準備室	207.85	デジタル展示システム(1)、展示パネル(25)、展示ケース(5)
2	シミュレーションルーム(小会議室)	65.65	プロジェクター(1)、スクリーン(1)、AV機器一式(1)、 スマートボード(1)
2	シミュレーションルーム(中会議室)	106.67	プロジェクター(1)、スクリーン(1)、AV機器一式(1)、 スマートボード(1)
2	シミュレーションルーム(大会議室)	179.44	プロジェクター(1)、スクリーン(1)、AV機器一式(1)、 スマートボード(1)
2	OAコーナー	9.6	OHP(1)、移動用スクリーン(1)、ホワイトボード(10)
3	デジタル編集室1(OA機器室)	43.29	コピー(1)、マイクロリーダープリンター(1)、 ポスタープリンター(1)、スキャナー(1)、
3	デジタル編集室2(教材作成室)	68.29	コピー(2)、印刷機(1)、製本機(2)、裁断機(1)、
3	アナログ書誌データベース	499.15	

貸出機材一覧

1. 書画カメラ付プロジェクター（東芝・TLP671） 2台
2. デジタルカムコーダー（SONY・DSR-PD150）2台
3. リモコン三脚（SONY・VCT-1170RM） 2台
4. デジタルビデオカセットレコーダー（SONY・DSR-V10）2台
5. エディットアダプター（SONY・DSRM-E1） 2台
6. ACアダプター（SONY・AC-V700） 2台
7. ACアダプター／チャージャー（SONY・AC-VQ850）2台
8. インフォリチウムバッテリー（SONY・NP-F960） 4個
9. デジタルカメラ（SONY・DSC-S70） 5台
10. デジタルカメラ（SONY・DSC-S75） 3台

資料5 大学教養研究センター横浜市港北区民講座

平成14(2002)年度「実践講座：ウォーキングの理論とその文化背景」

日時：平成14(2002)年11月2日(土)、9日(土)、16日(土) 3回開催

場所：日吉キャンパス来往舎(講座)

日吉キャンパス周辺(ウォーキングコース：松の川緑道、矢上川沿い遊歩道、日吉キャンパスの丘)

応募者数：69名(定員100名)

講師など：以下の講師・実践指導員など以外に実践講座コーディネーター1名

○講座について

日時：平成14(2002)年11月2日(土)

テーマ：「心を楽しませるウォーキング」

講師など：司会1名、講師1名

受講者数：49名

日時：平成14(2002)年11月9日(土)

テーマ：「自己探求の道：イギリスの歩く文化」

講師など：司会1名、講師1名

受講者数：52名

日時：平成14(2002)年11月16日(土)

テーマ：「健康のためのウォーキング～どのくらい？どのように？」

講師など：司会1名、講師2名

受講者数：52名

○実践について

日時：上記3日間

講師など：実践指導5名、実践指導補助・講座準備等(補助学生)9名

受講者：52名

平成15(2003)年度「DNAとナイロンの実験をしてみよう」

日時：平成15(2003)年9月20日(土)

場所：日吉キャンパス第二校舎実験室

講師など：コーディネーター2名、主任講師2名、実験指導講師5名

応募者数：33名(定員70名)

受講者数：26名(男11、女15)

資料6 大学教養研究センター極東証券寄附講座

平成14（2002）年度極東証券寄附講座『教養』とは何かーよりよく生きるためにー

○学生186名、一般388名、教職員24名、計598名の申込者。

テーマ：【新しい国づくりに求められる教養とは何か】

日時：平成14（2002）年10月 4日（金）

参加人数：311名（学生77、一般226、教職員8）

テーマ：【私にとって教養とは】

日時：平成14（2002）年10月 9日（水）

参加人数：322名（学生95、一般219、教職員8）

テーマ：【耕す人になるために】

日時：平成14（2002）年10月15日（火）

参加人数：290名（学生69、一般211、教職員10）

テーマ：【数学的思考と教養】

日時：平成14（2002）年10月21日（月）

参加人数：252名（学生54、一般188、教職員10）

テーマ：【現下の国際情勢とこれからの日本】

日時：平成14（2002）年10月28日（月）

参加人数：297名（学生66、一般227、教職員4）

テーマ：【教養は何のために必要なんですか？】

日時：平成14（2002）年11月 6日（水）

参加人数：453名（学生174、一般269、教職員10）

テーマ：【「教養する」現代人像】

日時：平成14（2002）年11月13日（水）

参加人数：205名（学生29、一般171、教職員5）

テーマ：【「教養」とは・・・歴史と文明の観点から】

日時：平成14（2002）年11月27日（水）

参加人数：197名（学生22、一般174、教職員1）

テーマ：【外国語教育は教養教育に貢献できるか】

日時：平成14（2002）年12月 5日（木）

参加人数：163名（学生21、一般139、教職員3）

テーマ：【シンポジウムーあらためて教養を考える】

日時：平成14（2002）年12月13日（金）

参加人数：167名（学生19、一般145、教職員3）

平成15(2003)年度極東証券寄附講座「生命の魅惑と恐怖」

○一般63名、学生67名、計130名の受講登録。

テーマ：【ガイダンスー生命をさまざまに考えることから始めてみよう】

日時：平成15(2003)年10月7日(火)

参加人数：100名(一般50、学生47、教職員3)

テーマ：【生きろって言われてもーシニカルでリズムカルな私達へ】

日時：平成15(2003)年10月14日(火)

参加人数：103名(一般51、学生49、教職員3)

テーマ：【犯行前後の精神状態ー正常か異常か?】

日時：平成15(2003)年10月21日(火)

参加人数：102名(一般43、学生56、教職員3)

テーマ：【ナチズムと身体ー優生学のユートピア?】

日時：平成15(2003)年10月28日(火)

参加人数：99名(一般44、学生50、教職員5)

テーマ：【性の魅惑、性の恐怖ー現代日本文化をめぐって】

日時：平成15(2003)年11月4日(火)

参加人数：92名(一般46、学生42、教職員4)

テーマ：【生命の法的保護をめぐる諸問題】

日時：平成15(2003)年11月11日(火)

参加人数：89名(一般45、学生40、教職員4)

テーマ：【二つの生権力ーホモ・サケルと怪物】

日時：平成15(2003)年11月18日(火)

参加人数：91名(一般46、学生40、教職員5)

テーマ：【バイオエシックスは死生をどう捉えてきたのか】

日時：平成15(2003)年12月2日(火)

参加人数：85名(一般45、学生36、教職員4)

テーマ：【新興・再興感染症の今日的意味】

日時：平成15(2003)年12月9日(火)

参加人数：75名(一般41、学生31、教職員3)

テーマ：【情報と生命ー生き物として輝くために】

日時：平成15(2003)年12月16日(火)

参加人数：90名(一般47、学生38、教職員5)

資料7 日吉企画行事委員会（HAPP）

2002年度新入生歓迎行事一覧

1. コンサート「春の声」
日 時：4月17日（火）16：30～18：00
場 所：来往舎イベントテラス
2. 塾長と日吉の森を歩こう・写真コンテスト
日 時：4月27日（土）13：00～
場 所：第4校舎J11番教室
3. ボールゲームフェスタ「フットサル」
日 時：7月28日（日）終日
場 所：ミズノフットサルプラザ日吉
4. 能楽 観世流「清経」
日 時：5月8日（水）18：30～20：00
場 所：来往舎イベントテラス
5. 学生企画「衝 うずき」
日 時：5月30日（木）～6月2日（日）18：30開演
場 所：来往舎イベントテラス
6. 学生企画「ネクスト・エイジャー」音と映像
日 時：6月11日（火）18：30～20：00
場 所：来往舎イベントテラス
7. デカルコマニ 展示とライブ（映像と音と香りの融合）＜小瀧昭夫企画＞
日 時：4月18日（木）～27日（土）10：30～18：00
場 所：来往舎ギャラリー・イベントテラス
8. 学生企画「月はやっと止まることができた」髑髏団公演
日 時：6月27日（木）～30日（日）19：00～21：00
場 所：来往舎ギャラリー・イベントテラス
9. コンサート「バロック後期のフルート音楽」
日 時：6月8日（土）15：00～16：30
場 所：来往舎ギャラリー
10. 映画「神の子たち」＜アートセンター企画＞と講演
日 時：6月21日（金）16：30～19：45
場 所：来往舎シンポジウムスペース
11. 学生企画「DE JAVU」From B 公演
日 時：11月7日（木）～9日（土）18：00開演
場 所：来往舎イベントテラス

12. コンサート「慶應コレギウム・ムジクム」
日 時：12月18日（水）17：00～18：00
場 所：来往舎ギャラリー・イベントテラス
13. コンサート「マサラ」
日 時：1月14日（火）16：30開演
場 所：第4校舎J11番教室
14. 写真展「キャンパス空間と身体」
日 時：12月18日（水）～21日（土）10：30～18：30
場 所：来往舎ギャラリー

2003年度新入生歓迎行事一覧（春学期）

1. 荻野アンナ講演会「フランス語と私」＜視聴覚教室共催＞
日 時：4月5日（土）10：45～12：15
場 所：第四校舎J21番教室
2. コンサート「春の声」
日 時：4月15日（火）16：30～18：00
場 所：来往舎イベントテラス
3. ボールゲームフェスタ「フットサル」
日 時：7月15日（火）終日
場 所：ミズノフットサルプラザ日吉
4. 能 楽「葵上」＜慶應義塾大学能楽研究会（観世会）共催、慶應観世後援会後援＞
日 時：5月21日（水）18：00～20：00
場 所：来往舎イベントテラス
5. コンサート「シャンソンの贈り物」
日 時：5月28日（水）16：30～18：00
場 所：来往舎イベントテラス
6. 小松原庸子講演会
日 時：6月4日（水）16：30～18：00
場 所：来往舎イベントテラス
7. 舞踏公演「野の婚礼―新しき友へ―」＜アート・センター共催＞
日 時：6月18日（水）17：30～19：30
場 所：来往舎イベントテラス

2003 年度 HAPP 公募企画（秋学期）一覧

企画名	企画責任者
Weather map	学生
彩りの書	職員
塾長と日吉の森を歩こう	HAPP 特別企画
色即是空	学生
法学部インテンシブコースドラマ	教員・学生
ARIA	学生